

青年期における養育者の代替となりうる安定した愛着対象の可能性

Possibility of Stable Attachment Figures Serving as Alternative Caregivers in Adolescence

224J2010 野口 紗良
Sara Noguchi

指導 井上 直子 教授
Thesis Supervisor: Naoko Inoue

国際学術研究科国際学術専攻心理学実践研究学位プログラム 臨床心理分野

Master of Arts Program in Clinical Psychology Master's Program in International Studies

International Graduate School of Advanced Studies J. F. Oberlin University

【問題と目的】養育者との根源的といえる愛着の不全は、個人の人生に強く影響を及ぼして生きにくさを助長し、ひいては社会全体の諸問題へと繋がると考えられる。安定した愛着の形成は臨床心理学的に重要な課題と言えよう。本研究は、安定した愛着を良好に形成し得る対象を、先行研究を概念的に追試検証しつつ、岡田（2011, 2016）が示唆する「近い実在の人物以外の他者」や「物質的对象」、または「社会概念的对象」などに拡張、それらが養育者との安定した愛着に比し、どの程度の有用性を備えるのかを検証することを目的とした。

仮説は以下のとおり 5 つとした。

＜仮説 1＞養育者以外の様々な対象とも、養育者との間の安定した愛着と同程度の愛着を形成し得る。

＜仮説 2＞仮説 1 は、たとえ養育者との間の根源的な愛着形成が不完全である場合でも成し得る。

＜仮説 3＞社会における他者との一般的な愛着状態は、「人」ではなく「もの」安定した愛着対象としている場合でも、「人」を愛着対象としている場合と同程度の安定性を持ち得る。

＜仮説 4＞養育者以外を安定愛着対象とする場合は、養育者を安定愛着対象とする場合に比べ、養育者との間の根源的な愛着の不安定傾向が強い。

＜仮説 5＞養育者との間の根源的な愛着の不安定傾向は、「その他の近い他者」を対象としている場合より、「直接的な接触のない他者」、「もの」、「抽象概念」を対象としている場合の方が強い。

【方法】18～30 歳の都内私立大学生 275 名を対象に質問紙調査を行った。手続きとしては、参加者に「愛着状態が安定しており良好であると主観的に考える対象」を、A「実親」、B「実親以外の近い他者」、C「A・B 以外の全て」から選んだ上で、「愛着機能尺度」（山口, 2009）、「一般他者を想定した愛着スタイル尺度」（中尾・加藤, 2004）、「親への愛着尺度」（丹波, 2005）に回答してもらった。その後、有効回答が得られた 258 名を分析対象とし、上記 3 尺度における A・B・C 各群の得点について分散分析と相関分析を行った。

【結果と考察】分散分析の結果、主観的な愛着機能（AFS）において 3 群間に有意な差は認められず、養育者以外の多様な対象も、主観的には養育者と同程度の安全基地になり得ることが示され、仮説 1 と 2 が支持された。一方、一般他者への不安（ECR-GO）では、C 群（非人的対象等）が A 群（実親）より有意に高く、仮説 3 は限定的な支持に留まった。これは、非人的対象を主な安定対象とする群が抱える、対人関係の希薄さに起因する不適応性の懸念を反映していると考えられる。しかし、C 群の具体的な対象を観みると、その過半数において人的キャラクター等の「自由意志」を持つと想定される「人」的对象が選択されていた。これは、C 群が対人不安ゆえに直接的な接触を回避しつつも、潜在的には「意志を持つ他者」との関わりを強く求めている可能性を示唆している。また、相関分析および分散分析の結果、養育者との根源的な愛着が不安定なほど、養育者以外を対象に安定を求める傾向が確認され、仮説 4 は支持された。一方で、B 群と C 群の間で養育者との不安定傾向に有意な差は見られず、仮説 5 は支持されなかった。

以上の結果より、青年期における C 群に見られた非人的対象への愛着は、単なる逃避ではなく、根源的な愛着不全を抱える人が対人関係へ再適応していくための「前段階的」な補完となる対象として、移行对象的な役割を担っている可能性が示唆されたと言えよう。本研究は、実在の他者に限定されない多様な愛着対象が、青年の心理的安定に寄与する新たな視点を提供するものである。

参考文献

- 中尾 達馬・加藤 和生 (2004). 一般他者を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討
九州大学心理学研究, 5, 19-27.
- 岡田 尊司 (2011). 愛着障害——子ども時代を引きずる人々—— 光文社
- 岡田 尊司 (2016). 愛着障害の克服——愛着アプローチで, 人は変わる—— 光文社
- 丹波 智美 (2005). 青年期における親への愛着と環境移行期における適応過程 パーソナリティ研究, 13, 156-159.
- 山口 正寛 (2009). 愛着機能尺度 (Attachment-Function Scale) 作成の試み パーソナリティ研究, 17, 157-167.